

ボランティア活動実践のための環境整備に関する研究 －中学生の意識分析を通して－

林 幸克

(国立オリンピック記念青少年総合センター (非))

【要旨】

ボランティア活動の定着を図るためには、どのような環境整備が必要となるのかを明らかにすることを目的に、茨城県下3中学校の3年生383人を対象に調査を実施した⁽¹⁾。

ボランティアを捉える新たな視点として「対人関係性」が推察され、それを反映し、複数で活動することが取り組みやすい実施形態であることがわかった。ボランティア活動の定着に、学校と地域社会は「量的に活動範囲・分野を拡充する」役割が期待される一方、学校におけるボランティア活動関連の情報提供は不十分であり、提供される情報内容も偏っていることがうかがえた。以上のことから、「対人関係性」に配慮したボランティア活動の実施と情報提供、情報活用能力の育成がボランティア活動実践には重要な課題であることが明らかになった。

Ⅰ. はじめに

2000（平成12）年度より、実施準備が整った小・中学校から導入する「総合的な学習の時間」に関する様々な議論がある。その中で、各学校がそれぞれに創意工夫をして、地域社会や学校、家庭、子どもの生活実態などを考慮したうえで、全教科に横断的で、総合的な学習、あるいは、子どもの興味・関心などに基づく学習を展開させようという動きが活発になっている。そうした動きの中で、様々な体験学習が企画・実施されようとしており、その一つにボランティア体験学習がある。

学校行事の一環として行われるボランティア体験学習は、どうしても教師主導の活動になりがちである。そのような活動に対して、子どもは賛否両論、様々な考えを持っていることが明らかになった⁽²⁾。特に、過度に学校に依存する子どもの実態が見受けられたことは大きな特徴であった。その現象の要因の一つとして、子ども自身が、ボランティア活動に関連する情報を、自分の主体性に基づいて把握・収集できていないのではないかということが考えられた。

そこで、そのような子どもの実態を踏まえながら、ボランティア活動関連情報の提供とそれを取り巻く学校、家庭、地域社会が与える影響に着目して、ボランティア活動を定着させるには、どのような条件や環境整備が求められるのかを、中学生の意識分析を手がかりに明らかにしていく。

Ⅱ. ボランティア観と活動しやすい実施形態

まず初めに、ボランティア活動がどのような活動として捉えられており、また、ボラン

ティア活動に取り組むに際して、活動しやすくなるために必要となる活動環境・条件を把握しよう。なお、回答は、複数回答とした。

表1 ボランティア観

	A N=192	B N=68	C N=123	全体 N=383
(1)自分の意思 (%)	146 (76.0)	53 (77.9)	100 (81.3)	299 (78.1)
(2)期待しない (%)	24 (12.5)	9 (13.2)	22 (17.9)	55 (14.4)
(3)社会のため (%)	120 (62.5)	34 (50.0)	68 (55.3)	222 (58.0)
(4)新しいこと (%)	10 (5.2)	6 (8.8)	1 (0.8)	17 (4.4)
(5)時間がある (%)	8 (4.2)	4 (5.9)	2 (1.6)	14 (3.7)
(6)自分が満足 (%)	9 (4.7)	6 (8.8)	8 (6.5)	23 (6.0)
(7)特別な知識 (%)	3 (1.6)	1 (1.5)	1 (0.1)	5 (1.0)
(8)触れあい (%)	59 (30.7)	20 (29.4)	40 (33.3)	119 (31.3)
(9)その他 (%)	2 (1.0)	2 (2.9)	2 (1.6)	6 (0.2)

表2 ボランティア活動に取り組みやすくなる環境

	A N=192	B N=68	C N=123	全体 N=383
(1)友達と一緒に (%)	146 (76.0)	35 (51.5)	86 (69.9)	267 (69.7)
(2)情報の提供 (%)	58 (30.2)	31 (45.6)	29 (23.6)	118 (30.8)
(3)家族で活動 (%)	25 (13.0)	9 (13.2)	8 (6.5)	42 (11.0)
(4)地域で活動 (%)	54 (28.1)	31 (45.6)	55 (44.7)	140 (36.6)
(5)小さい頃 (%)	30 (15.6)	6 (8.8)	11 (8.9)	47 (12.3)
(6)雰囲気 (%)	52 (27.1)	15 (22.1)	40 (32.5)	107 (27.9)
(7)その他 (%)	4 (2.1)	3 (4.4)	3 (2.4)	10 (2.6)

- (1)自分の意思で進んで行う活動
- (2)お礼に何かをもらうことを期待しない活動
- (3)社会のためになる活動
- (4)誰もやっていないような新しいことをする活動
- (5)時間に余裕がある人が行う活動
- (6)自分が満足するために行う活動
- (7)特別な知識・技術が必要な活動
- (8)人と人とがコミュニケーションを図る活動

- (1)友だちと一緒に活動する
- (2)活動の機会・情報を提供してもらう
- (3)家族でボランティアに携わっている人がいる
- (4)地域で活動が日常的に行われている
- (5)小さい頃からボランティア活動に関する教育・指導を受ける
- (6)ボランティア活動は特別なものではないという雰囲気がある

II-1. ボランティア観

全体では「自分の意思で進んで行う」という回答が78.1%で最も多く、以下「社会のためになる活動」(58.0%)、「人と人とがコミュニケーションを図る活動」(31.3%)となった(表1)。このことから、約8割の生徒は、ボランティア活動を自分から進んで行う、自発的な活動であると考えていることがわかる。また、約6割の生徒は社会に貢献することができるような、社会性のある活動として考え、3割の生徒は、人間同士が触れあうことでコミュニケーションを図る活動であると捉えていることが明らかになった。

一般的には、ボランティア活動というと、自発性、社会性、無償性、先駆性の4つが基

本理念とされている⁽³⁾。しかし、本研究の調査結果を踏まえると、無償性・先駆性の2つの理念はそれほど強く意識されておらず、自発性・社会性・対人関係性の3つを代表的なボランティア観として抱えていることがうかがえる。ここでいう「対人関係性」という概念の定義は、「人と人とがコミュニケーションを図りながら、協働して活動を行うこと」とする。この場合の“人と人”とは、基本的には“ボランティア活動をする側同士の人間関係、ボランティア活動する側とその受け手の間の人間関係”を意味し、“ボランティア活動を行う際に生じるあらゆる人間関係を含むもの”として捉えることにする。

特に、「対人関係性」というボランティア観はボランティアを捉える新たな視点として考えられるのではないだろうか。このようなボランティア観が生じる背景には、学校行事などで行われるボランティア体験学習等の影響があるように思われる。学校のボランティア体験学習では、福祉施設の訪問が多く、そこで障害者や高齢者の方々とレクリエーションや作業などを通じて触れあうような活動が行われている。実際、今回調査した3校とも、施設訪問・交流活動を行っている。そこには、学校側の、普段あまり接する機会が持てない人々との触れあいを通して、生徒にそうした人々の生活や考えなどを肌で感じさせ、理解してもらいたいという意図がある。約3割の生徒がボランティア観として「対人関係性」を考えている結果から、その意図は生徒に伝わりつつあると考えてもよさそうである。つまり、学校行事での取り組みが、他者との交流を目的とした活動であるため、生徒が他者とコミュニケーションを図る、「対人関係性」を有する活動としてボランティア活動を捉えるようになってきているのではないかと思われる。

また、約8割の生徒が「自発性」をボランティア観として捉えているのは、活動する場所や機会などは学校側が用意したものであっても、そこでの活動に自分から進んで取り組むのであれば、それを「自発性」として捉えているためではないかと考えられる。

それから、学校で活動する場合は、目新しいことを行うことはほとんどなく、専門的な知識・技能を必要とする活動を行うことも、長期的・計画的に指導していなければ困難である場合がほとんどである。これらのことを考慮すると、中学生にとっての“ボランティア観”というよりも、むしろ、“学校におけるボランティア体験学習観”と捉える方が正確であるのかもしれない。

II-2. ボランティア活動に取り組みやすくなる環境

ボランティア活動に取り組みやすくなる環境や条件として、全体的には「友だちと一緒に活動する」という回答が69.7%で最も多かった。以下「地域で活動が日常的に行われている」(36.6%)、「活動の機会・情報を提供してもらおう」(30.8%)という回答が続いた(表2)。

この結果から、約7割の生徒は、自分ひとりだけではなく、友だちと一緒に複数で活動する方が活動しやすいと考えていることがわかる。ここにも「対人関係性」の理念が反映されているのではないかと思われる。また、約35%の生徒は地域社会において活動が日常的に行われていることを挙げ、約3割の生徒は、ボランティア活動に関する機会や場所、情報を提供してもらおうことで活動に取り組みやすくなるようである。

これら上位3項目の回答から、「学校や地域社会において、ボランティア活動関連情報

を提供してもらい、友だちと一緒に集団で、日常的に活動が行われている地域で活動すること、ボランティア活動に取り組みやすくなる実施形態が整うのではないかと考えられる。

本研究で調査した3中学校のボランティア体験学習などは、学年・学級単位、あるいは小グループ単位で活動が行われており、複数で活動しているという意味では生徒が活動しやすい形態である。また、その活動は学校内だけに留まることなく、地域でも行われているので、生徒が地域に対して、日常的に活動できる場所があるという認識を持つことには有効であると思われる。ただ、活動の機会や場所に関する情報提供に関しては、学校側から生徒側への一方的なものが中心であり、生徒が情報を取捨選択する余地や希望を出すようなケースはほとんど見られなかった。そこで、学校は、情報提供について、生徒との双方向性を保ちながら、より柔軟な情報提供の方法を検討し、実践する必要があるのではないかと考えられる。

Ⅲ. 学校、家庭、地域社会がボランティア活動の定着に与える影響

次に、ボランティア活動を広めていくために、学校、家庭、地域社会の中で、最も影響力があるのはどれかを聞き（表3）、三者それぞれの影響力が大きいと考える具体的な理由を回答してもらった（表4）。なお、後者の質問項目の回答は複数回答とした。

表3 学校、家庭、地域社会で最も影響力を有する存在

	A N=192	B N=68	C N=123	全体 N=383
学校	103	41	69	213
(%)	(53.6)	(60.3)	(56.1)	(55.6)
家庭	11	4	7	22
(%)	(5.7)	(5.9)	(5.7)	(5.7)
地域社会	78	23	47	148
(%)	(40.6)	(33.8)	(38.2)	(38.6)

表3より、全体としては「学校」からの影響力が大きいという回答が55.6%で最も多く、以下「地域社会」が38.6%、「家庭」が5.7%という回答であった。この結果、半数以上の生徒は「学校」の影響が大きいと感じており、約4割の生徒が「地域社会」の影響が強いと考え、「家庭」の影響力の強さを認める回答は約5%でわずかしが存在しないことがわかった。つまり、ボランティア活動を定着させるためには、「学校」と「地域社会」の影響は大きい、「家庭」の影響はほとんどないということが明らかである。そこで、本研究では、「学校」と「地域社会」に焦点を当てて、両者が与える影響について考察を進めることにする。

では、「学校」と「地域社会」の影響力が大きいと考える具体的な理由にはどのようなものがあるのかを検討してみよう（表4）。

「学校」の影響が最も大きいと回答した理由に関しては、「ボランティア活動に参加する人数が増えるから」という回答が59.2%で一番ポイントが高く、以下「自分の周りの人

表4 最も影響力があると思う理由

	学校 N=213	家庭 N=22	地域社会 N=148	全体 N=383
(1)ボランティア活動に参加する人数が増えるから (%)	126 (59.2)	3 (13.6)	64 (43.2)	193 (50.4)
(2)活動内容をより専門的に深められるから (%)	29 (13.6)	3 (13.6)	29 (19.6)	61 (15.9)
(3)そこにいる人々と接している時間が長いから (%)	46 (21.6)	13 (59.1)	19 (12.8)	78 (20.4)
(4)その人々が尊敬できる人物だから (%)	3 (1.4)	4 (18.2)	6 (4.1)	13 (3.4)
(5)ボランティアに関する情報を得ているから (%)	37 (17.4)	4 (18.2)	21 (14.2)	62 (16.2)
(6)自分の周りが活動していると 他の人もつられて活動するから (%)	69 (32.4)	4 (18.2)	39 (26.4)	112 (29.2)
(7)活動範囲が広がるから (%)	58 (27.2)	4 (18.2)	67 (45.3)	129 (33.7)
(8)そこにいる人々との信頼関係が形成できているから (%)	28 (13.1)	6 (27.3)	32 (21.6)	66 (17.2)
(9)その他 (%)	7 (3.3)	1 (4.5)	5 (3.4)	13 (3.4)

が活動していると、他の人もつられて活動するから」(32.4%)、「活動範囲が広がるから」(27.2%)となった。この結果から、上位3項目の回答に共通していることは、「量的な広がりが期待できる」ということであるように思われる。つまり、「学校」において活動する場合は、全校規模であれ、学年単位・クラス単位であれ、ある程度のまとまった人数で活動に取り組むことになる。そのため、行事などでボランティア活動に取り組むことになれば、参加する人数も多くなることが予想され、それに伴い、取り組む活動の範囲・分野も拡大するのではないかと捉えることができる。「学校」の及ぼす影響力が大きいと考えるのは、「活動に参加する人の量的な増加が期待され、それによって活動分野も拡大される」という理由が挙げられそうである。

次に、「地域社会」の影響力が大きいのはどのような理由からなのかを検討することにしてしよう。「活動範囲が広がるから」という回答が45.3%で最も多く、以下「ボランティア活動に参加する人数が増えるから」(43.2%)、「自分の周りの人が活動していると、他の人もつられて活動するから」(26.4%)となった。これら上位3項目の回答は、順序こそ違うが、「学校」の影響力が大きいと考える理由と全く同じである。「学校」の場合と同様に、「地域社会」で活動に取り組むことになれば、大規模な活動の展開が可能となり、活動する人数が多くなることで、活動範囲も拡大することが考えられる。つまり、量的に増加することが、活動範囲・分野の拡充につながり、ボランティア活動を広めていくことに大きな影響を及ぼしていると捉えることができる。

ボランティア活動の定着を図るために、「学校」と「地域社会」は、「量的に活動範囲・分野を拡充する」という影響力を有することが明らかになった。活動範囲・分野を拡

充するためには、活動する人数を増加させることが前提となるのではないだろうか。活動する過程において、様々な人々との関わりが生じるはずである。それに対応するために、「対人関係性」を円滑に形成する能力の習得が求められるようになるのではないかと考えられる。

IV. ボランティア活動関連の情報提供の現状

最後に、実際にボランティア活動に取り組む際に、マスメディア（ここでは、テレビ・新聞・雑誌を指すものとする）からどのような影響を受けているのか明らかにし、また、中学校側からのボランティア活動関連情報の情報提供の実態を把握する。

表5 マスメディアからの影響

	A N=192	B N=68	C N=123	全体 N=383
(1)情報の獲得 (%)	55 (28.6)	27 (39.7)	42 (34.1)	124 (32.4)
(2)内容の理解 (%)	30 (15.6)	1 (1.5)	13 (10.6)	44 (11.5)
(3)活動の拡大 (%)	22 (11.5)	16 (23.5)	12 (9.8)	50 (13.1)
(4)できる活動 (%)	56 (29.2)	14 (20.6)	31 (25.2)	101 (26.4)
(5)やる気なし (%)	4 (2.1)	1 (1.5)	1 (0.8)	6 (1.6)
(6)影響はない (%)	23 (12.0)	7 (10.3)	23 (18.7)	53 (13.8)
(7)その他 (%)	2 (1.0)	2 (2.9)	1 (0.8)	5 (1.3)

- (1)自分が知らなかった情報を得ることができる
- (2)具体的な活動内容がわかるようになる
- (3)いろいろな分野にボランティア活動が関わっていることがわかる
- (4)自分でもできるボランティア活動があることに気付く
- (5)ボランティア活動を行おうという気なくなる

表6 中学校側からの情報提供の現状

	A N=192	B N=68	C N=123	全体 N=383
十分である (%)	64 (33.3)	30 (44.1)	29 (23.6)	123 (32.1)
十分ではない (%)	128 (66.7)	38 (55.9)	94 (76.4)	260 (67.9)

IV-1. マスメディアからの影響

全体では「自分が知らなかった情報を得ることができる」という回答が32.4%で一番多く、次には「自分でもできるボランティア活動があることに気付く」が26.4%で続いた（表5）。つまり、3割以上の生徒は、マスメディアによってそれまで自分が知らなかった情報を得ることができると感じており、約25%の生徒は、自分でも活動できるボランティア活動が存在するを知るようになってきていることが明らかになった。

このことは、生徒たちの持つボランティアに対するイメージが、通常、福祉ボランティアに限定されがちであったこととも関連し⁽⁴⁾、マスメディアを通じてより身近な、福祉以外のボランティア活動の存在を認知するようになったことを表わしているのではないかとと思われる。この背景には、学校や家庭、地域において、ボランティア活動に関する情報提供が不十分であること、あるいは、学校などから提供される情報は内容的に偏りがあり、活動分野も限定されていることが関わっているのではないだろうか。このことを考慮する

と、生徒も含めた学校及び社会一般は、ボランティア活動に関する捉え方をもっと柔軟にする必要があるそうである。そのためには、学校もマスメディアも、相互の情報がある程度は重複する場合があろうと、ボランティア活動関連情報をより幅広く提供することが望まれているのではないかとと思われる。

IV-2. 中学校側からの情報提供の実態

全体的には、学校からの情報提供が「十分ではない」という回答が67.9%で、約7割の生徒は、ボランティア活動関連情報を十分には獲得していないと感じていることがわかる（表6）。1993年に総務庁が実施した『青少年のボランティア活動に関する調査』⁽⁵⁾を参照すると、学校に「ボランティア活動」の情報を提供する場所があったら、それを利用したいかという質問に対して、41.4%の生徒が「利用したい」と回答している。このことから、4割以上の生徒は、ボランティア活動関連情報を提供してくれる場所・空間があるのであれば、それを活用する意思があることがわかる。約7割の生徒が、中学校における情報提供が「十分ではない」と捉えている現状を改善するためにも、学校側はボランティア活動関連情報を生徒側へ提供する“場所・空間”を常設する必要があるのではないかとと思われる。また、提供する情報内容としては、ボランティアを捉える新たな視点であると思われる「対人関係性」に配慮した情報を中心に提供することが望ましいのではないかと考えられる。

そして、情報提供の場が生徒に定着するようになったら、学校主導から、生徒主導の運営へと変えていくことが望ましい。というのも、学校から生徒への情報提供よりも、生徒から生徒への情報提供というシステムの方が、その情報を身近に感じることにつながり、活用しやすくなるのではないかとと思われるからである。新しいボランティア活動関連情報は、常時、学校が提供し、それを運営主体の生徒が広めて、定着させていくようにするシステムが確立されれば、情報提供が「十分ではない」という状況は改善されるのではないかと考えられる。それと同時に、ボランティア活動への親しみも増すことになり、ボランティア活動の定着につながるのではないだろうか。

V. おわりに

ボランティア活動について考える際に、「人と人とがコミュニケーションを図る活動」と捉える意識がやや強いのではないかと推察されるが、それは、ボランティアの活動内容と活動形態、両面の関わりから生じているように思われる。活動内容では「他者と接する活動」を考え⁽⁶⁾、活動形態としては「友だちと複数で活動すること」を意識していることが明らかであり、それが「対人関係性」というボランティア理念にも反映されているようである。これは、中学生が様々な人々との触れ合いをボランティア活動に期待していることを意味し、また同時にボランティア活動は「対人関係形成能力」の育成を図ることが可能な活動であることを示唆しているのではないかとと思われる。その「対人関係形成能力」育成を主眼としたボランティア活動を企画・実施することが、ボランティア活動の定着・拡充を図るために求められる要因の一つになるのではないだろうか。

また、ボランティア活動関連情報の情報提供という側面から考えた場合、中学生が入手

している情報には偏りがあり、また獲得している情報量そのものも不十分であるという実態があった。そこで、学校や地域社会などにおいて、生徒のニーズや「対人関係性」というボランティア観を考慮しながら、積極的な情報提供に取り組む必要が生じることは当然なことであるのかもしれない。しかし、もう少し踏み込んで、今日の高度情報社会という現実を念頭に置いた時、自らで必要な情報を獲得する「情報活用能力」育成がより重要になるのではないだろうか。つまり、「いつ、どこで、誰を対象に、どのような活動が行われているのか」など、活動に必要な情報を受動的に得るのではなく、能動的に検索する「情報活用能力」育成がボランティア教育の大きな要素の一つとなるのではないかと考えられる。ボランティア教育の一環としての「情報活用能力」育成も、ボランティア活動を定着させるために不可欠な要因となるのではないと思われる。

〔注〕

- (1)調査の概要は次の通りである。調査対象校は茨城県下の中都市部校（A校）、山村部校（B校）、都市部校（C校）の3中学校である。調査実施時期は1998年6月であり、3校の3年生383人に対して質問紙調査を行った（有効回答回収率97.2%）。
- (2)林 幸克 「学校行事として行うボランティア体験学習に関する実証的研究」
『日本特別活動学会第8回大会研究発表要旨収録』 1999 p.36
- (3)生涯学習審議会答申 『今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について』
1992
- (4)林 幸克 「中学2年間におけるボランティア活動に対する意識・実態の変化—中学校での事例を中心に—」 『日本生涯教育学会論集20』 1999 pp.127-128
- (5)総務庁青少年対策本部 『青少年のボランティア活動に関する調査』 報告書
大蔵省印刷局 1994 p.109
- (6)前掲(4)

〔参考文献〕

- ・宮川八岐編 『体験・ボランティア活動の考え方・進め方』（教職研修『総合的な学習』の実践 NO.5） 教育開発研究所 1999
- ・上杉賢士・田中雅文編著 『中学生にボランティア・スピリットを育てる』 明治図書 1997
- ・児島邦宏編著 『中学校・ボランティア活動の実践プラン』 明治図書 1996
- ・群馬県生涯学習センター編 『ボランティア活動に関する情報の収集・提供機能等の実態調査』 報告書 群馬県生涯学習センター 1996